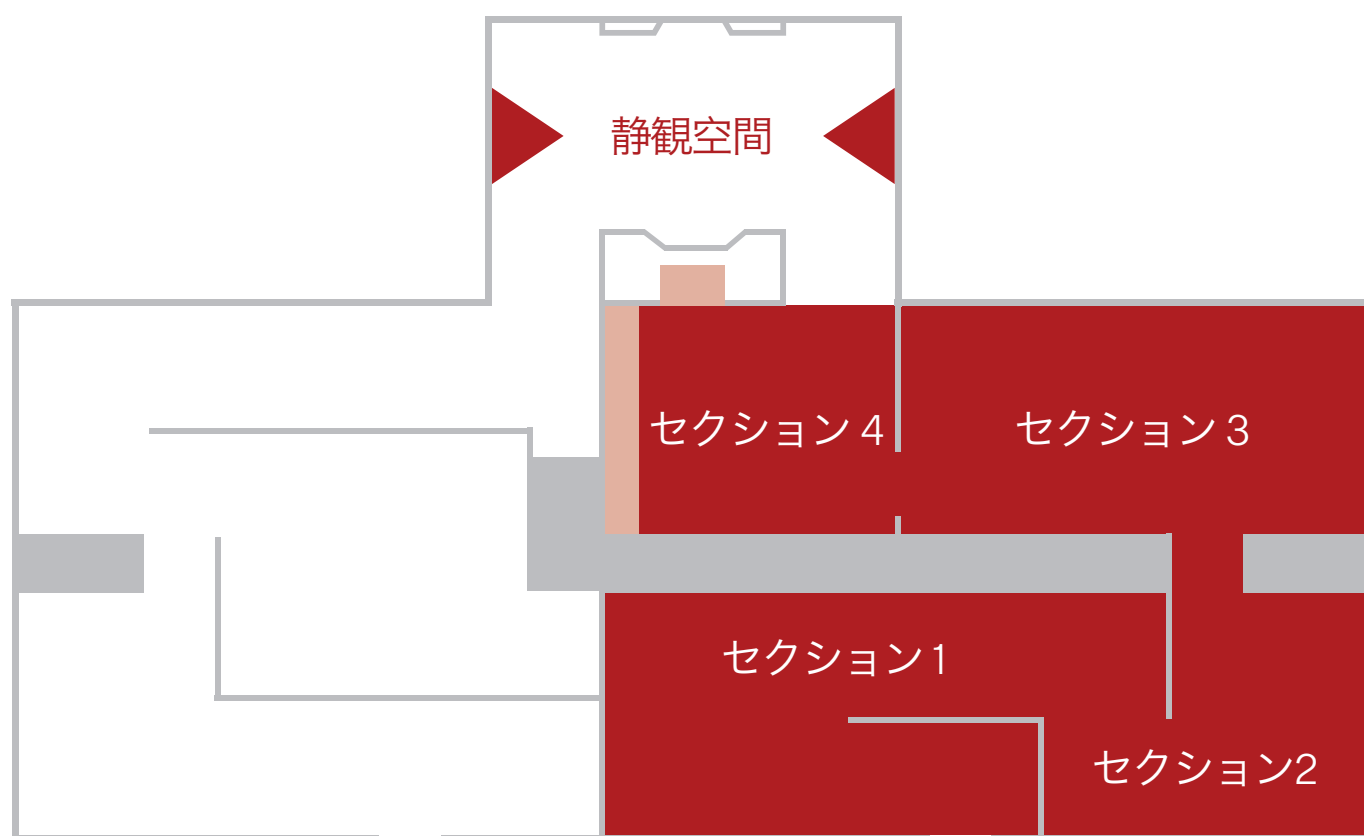


# Life IN EDO



ギャラリーのフロアマップ

# セクション1

## トラベル

### 初代歌川広重 幼童行列道中之図 1830年代

通常の大判錦絵三枚続が縦に配置した紙面を連続させた画面であるのに対し、本図は大判を横に繋いだワイドな画面。そこを往くのは子供達の行列だ。よく見るとこれ、大名行列のようで、画中からは「下に～、下に～」という声さえも聞こえてきそうである。御弓持ちや金紋先箱、毛槍を持つ子供の姿も見える。広重作品には数多く大名行列が描かれており、中でも「東海道五十三次之内 日本橋」が有名だ。しかしその多くは、肅然として隊伍を組んだ行列というイメージとは程遠い「ユルさ」を見せている。子供達のこの行列のほうがまだしも生真面目、と言えるかもしれない。本図は子どもを主題とした浮世絵の一ジャンルである子供絵作品。画面中央に大きく富士を配して広やかな視覚が提供される。画面中央は三保の松原だろうか。白い帆をあげて進む舟が海上を進む。

5番

### 東洲斎写楽 二世嵐龍蔵の金貸石部金吉 1794年

これは歌舞伎の演目のシーンで、金貸しが病を負う貧しい浪人とその妻から借金の返済を迫っている様子である。売春の生活のため金貸しに自分たちの娘を渡す。二代目龍蔵が憎々しい人物像を演じることによって、金貸しがより複雑な人物となる。いじめっ子のような非情な態度のように見えるが、彼の目には自信のなさが見受けられる。

観客は好きな歌舞伎役者に会いに行った。役者たちはスターで、今日のアイドルのような有名人だった。写楽は役者の演技を表現力豊かな描写で見事に捉え、彼らを18世紀後半の有名人に仕立て上げた。

37番

**葛飾北斎**  
**春興五十三駄之内 宮**  
**1804年**

すらりと背の高い旅の女性が三人、東海道宮の宿場を越えたところだ。傍らには梅と思しき花が咲いている。宮の宿場は熱田神宮（現名古屋市熱田区）の門前町。東海道はそこから、名古屋市内には入らず左に曲がって伊勢、桑名へと向かう。ほどなく到着する堀川岸が、桑名へと向かう海上七里の渡し口だ。舟賃は一人六十八文（約千円）ほどと『五海道中細見記』は記している。画面左側に見えるのが桑名松平家の居城・桑名城で、海上の渡し口は城の北辺にあたる。なお江戸時代の女性の旅は大変だったようだ。と言うのも、女性が旅をする場合には通行手形（関所手形、女手形）の携帯が義務づけられ、そこには身元や旅の人数、乗り物使用の有無などが記される仕組みになっていたからだ。ちなみに女性たちの後ろにいる振り分け荷物の男性は荷物持ちの人足。

4番

**溪斎英泉**  
**美人東海道 藤枝駅 廿三**  
**1842年頃**

画面上部に街道の様子を描き、中央に女性像を描いた「美人東海道」シリーズの中の一図。湯上りなのか、左肩に豆絞り柄の手ぬぐいをかけ、足の指の爪を切っている女性が描かれている。お世辞にも行儀が良いとは言えない所作だが、奇妙な生々しさがあり、女性の体臭さえ漂ってきそうな作品。爪を切る女性の姿は浮世絵にしばしば描かれているが、いずれも本図と同様、糸切り鋏（和鋏）を用いている。足元には英泉作品にしばしば見られる「美艶仙女香」の包み。寛政から化政年間（1789-1831）に活躍した名女形、三世瀬川菊之丞（1751～1810）の通称「仙女」にちなんで名付けられた白粉だった。立て膝で足の爪を切るという主題は描き継がれていくが、近い時期の作例としては三代歌川豊国「花暦吉日姿爪とりよし」（1845（弘化元）年頃）がある。

14番

**初代歌川広重**  
**道中膝栗毛 参宮道白子**  
**1830年代後半**

日本中誰しもが知る、ご存じ弥次郎兵衛、喜多八（北八とも）の道中記『道中膝栗毛』（十返舎一九作、1802-1809（享和2-文化6）年、後に「発端」一冊が文化11年刊）。幕末の文久2（1862）年の改版が知られるなど、江戸後期の滑稽本における大ヒット作だった。そしてこの書物の流行が、広重らの風景版画、特に街道絵制作を後押ししたことも知られている。実際、広重の「東海道五十三次之内 鞠子」（118番、前期に展示）でとろろ汁を食べる二人連れを弥次喜多と目する説もあり、遙か後年の「五十三次名所図会 廿八 赤坂」では彼らが画中に登場する。また加えて「膝栗毛道中雀」のシリーズや双六「浮世道中膝栗毛滑稽双六」などもある。「参宮道白子」は伊勢街道白子宿（現三重県鈴鹿市）でのエピソード（五編下）。馬方の誘いに乗り馬に乗った喜多八だが、その馬方は借金取りに追われており、借金のカタとして馬が奪われそうになり、という件が描かれる。

7番

**初代歌川広重**  
**東海道五拾三次之内 庄野 白雨**  
**1833年頃**

現在の三重県鈴鹿市。副題「白雨」が示す通り、にわかに降ってきた雨の中、雨宿りに駆け出す人々が描かれる。笠をかぶったり、駕籠に囲いをしたり、傘をすぼめたりしてそれぞれに雨宿りの場所を探している様子。注目すべきは構図だ。画面右下から左上へと道が渡され、薄墨で描かれた雨がこれに交差しているが、その角度はほぼ直角。左端の坂を駆け上ろうとする人物や、右方、笠に手をやって下向きに駆け出す人物の足先などを見ても、スピード感があふれていることがわかる。図自体に空間の奥行きを志向する表現は感じ取れないが、唯一、背景の樹木によって遠近感が確保される。樹木はまるで揺れているように見えるのだが、それは樹木の遠近を三層に描き分けているからだろう。一番近くの樹木は輪郭線を伴って明瞭に、次の層はやや濃い墨を用いてシルエットに、そして最も遠方は薄い墨のシルエットとして描かれている。

12番

**初代歌川広重**  
**東海道五拾三次之内 三島 朝霧**  
**1833 - 34年頃**

この版画は東海道の11番目の宿場である三島（静岡県）を描いたもの。構図や技術によって遠近の錯覚を作り出し、さらに前方の強い色彩と背後の人物のシルエットや建物の影を見せている。三島神社の鳥居が後方に見える。

9番

**初代歌川広重**  
**富士三十六景 駿遠大井川**  
**1858年**

江戸防衛の観点から架橋されなかった大井川。長雨によって増水すればすぐに川留めとなり、平時も川越し人足の担ぐ輦台（連台）や肩車などによって渡るしか手段はなかった。大井川の普段の水位は二尺五寸（約76cm）であり、四尺五寸（約136cm）を越えると川留めになったという。「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と箱根馬子唄に歌われた、東海道最大の難所である。手前には駕籠のまま輦台に乗せてもらっている女性が一人描かれる。心許ないのか、右手は駕籠を左手は座布団をしっかりと掴んでいる様子。一方左方には輦台の上に向かい合って座る女性たち。おしゃべりを楽しんでいるのだろうか。奥の方には人足の肩車に乗って渡る人や、更に後方には大名行列が川渡りを行うところなのか、ざっと10人以上の人足が担ぐ乗物（大名輿）も描かれる。なお「富士三十六景」シリーズは広重最晩年の作品で、刊行は没後の1859（安政6）年であった。

15番

**歌川国貞（三代豊国）**  
**東海道五十三次之内 桑名宿**  
**1815年頃**

桑名は現在の三重県桑名市。東海道42番目の宿場町である。太平洋沿いに行く東海道は、宮（愛知県名古屋市）から海上七里（約28km）を渡り、桑名宿に着く。本図の背景に見えるのが桑名城で、松平越中守十万石の居城。広重「東海道五十三次」などに代表される東海道モノの浮世絵の多くは、桑名城を描いている。本図は団扇絵の判型による役者見立ての東海道シリーズとして企図されたものと思われ、描かれている役者は、その顔貌から、おそらくは五代目の岩井半四郎（1776-1847）であろうと思われる。

18番

歌川貞秀  
真柴久吉公播州姫路城郭築之図  
1862年

世界文化遺産、姫路城。1580（天正8）年、織田信長の中国攻め担当の将であった羽柴秀吉（豊臣秀吉）が播州を平定し、この地に城を持っていた黒田家から譲り受けたのが、現在の姫路城の始まりであるとされる。播州平定の1580年4月から翌年3月にかけて大改修を施して近世城郭のスタイルとし、姫路城と名をつけた。本図は秀吉による姫路城の大改修を描いたもの。瀬戸内の海を背景にし、真正面に大きく姫路城を配する。大掛かりな足場が設けられ、そこでは秀吉とその配下の武将たちが直接指揮を取っている様子がわかる。最も高い位置の足場には秀吉（画中では真柴久吉）が、また周囲には片桐且元（畑切且元）や浮島正則（福島正則）、佐藤正清（加藤清正）が忙しく立ち働いている。鳥瞰図を得意とした貞秀だが、本図は、その初期作「三国第一山之図」と同様、大きなモチーフを正面に配し、加えて俯瞰視点を加えた二重視点構図の興味深い作例である。

19番

美容

二代喜多川歌麿  
東風流川添柳  
1804 - 18年

二代喜多川歌麿は初代歌麿の弟子として、歌麿の没後に師の名を継ぎ、師の画風に忠実な美人画を描いた。個室を持たない下位の遊女たちの、日常の姿が描かれている。廁へ行くのか、懐紙を顎にはさみ、簪が落ちないように手で支えながら急ぐ遊女。その背後には、蛸の膾が見える。手前の遊女は髪型が崩れないように、鬘を紐で縛っている。お務めが終わったので、蛸を肴に手酌でくつろいでいるのだろう。遊女の身体にそって描かれた着物の縞が、曲線を強調している。「縞」は、もともとは「島」を意味し、棧留縞（唐棧留、唐棧。インド・サントメ由来）や弁柄縞（インド・ベンガル由来）など、南方の島々からもたらされた柄だったことから名付けられた。江戸中期以降は木綿の普及と相まって大流行した。

21番

**二代歌川豊国・歌川国弘**  
**風流東姿十二支 申**  
**1830年代**

「風流東姿十二支」は「十二支」の題の通り、12枚揃いの中の一図。二代豊国が様々な階層の美人を半身像で描き、上部のコマ絵は二代豊国の門人の国弘と国久女とが十二支の動物を描いた。二代豊国は、同門の歌川国貞（三代豊国）が後に「二代」を称したため、「本郷豊国」と呼ばれ、国貞に比べて影の薄い存在であるが、この揃物は二代豊国の高い力量を示している。コマ絵には、国弘が三番叟を舞う猿を描いている。三番叟は、初春など祝いの行事に行われた。縞に撫子をあしらった着物を着た娘が、口に櫛をくわえたまま、黒髪をまとめようとしている。着物の脇を縫い留めていないので、この娘は未婚である。吊り上がった目元と鼻筋の通った娘の顔立ちは、国貞の顔貌表現に似通っており、二代豊国は当時の流行に従っていたことがわかる。

25番

**初代歌川豊国**  
**鏡台前**  
**1820年頃**

すすきの中に飛ぶ蝶が描かれた長襦袢だけを着て、くつろぐ遊女。襦袢の裾からのぞく足が艶めかしい。湯上りなのか脱ぎ捨てた卍模様の小紋の着物が見える。通常、遊女は、朝に風呂に入っていた。手拭で良く顔を拭いているので、これから化粧をするのだろう。鏡箱には、白粉を溶く皿や水刷毛が置かれている。鏡箱の傍の金盥の中には水を入れた漱茶碗が入っており、その上には房楊枝が置かれている。房楊枝は箸のように切った柳の先端を叩いて房のようにしたもので、これで歯を磨いた。先が赤くなっているのは、紅入りの歯磨き粉を使ったからだろう。紅入り歯磨き粉は、房州砂に麝香や白檀、龍腦などの香料で香りづけし、紅を加えたもので、一般にも良く使われていた。

23番

**歌川国貞（三代豊国）**  
**今様三十二相 すすしさう**  
**1859年**

女性の背後に水を張った盥が見えるので、行水の後のさっぱりとした姿だろう。藍で絞り染された浴衣が涼しそうである。「豊国画」と記された隣に「横川彫竹」と彫師の名も記されている。髪が生え際の精緻な線には、頭彫りの名手と言われた彫竹の卓越した技術が示されている。コマ絵から、団扇の柄が飛び出している。団扇の隣に置かれている浅鉢の植物は、フトイだろうか。団扇には、玄魚という署名が記されている。玄魚は、梅素亭玄魚のことだろう。団扇に描かれているのは、神仏の護符を入れて身につけた懸守。鎖の紐がついた懸守は、特に男伊達や粋筋の人々に好まれた。女性が振り返ってコマ絵に微笑みかけているので、団扇絵は特定の伊達男を暗示しているのではないだろうか。

27番

**歌川国貞（三代豊国）**  
**当世三十二相 しまひができ相**  
**1820年頃**

「当世三十二相」は女性の上半身を描く揃物で十図が知られる。「三十二相」とはもとは仏教用語で、仏陀が32の好相をそなえていたことを意味した。「しまひ」とは身仕舞い、化粧をして身支度を整えること。鏡の前には水で溶いた白粉がある。女性は遊女だろう。もろ肌を脱いで、白粉化粧の真っ最中である。合わせ鏡で確認し、襟足の白粉を指で延ばしているのだろう。細かい縞に竜田川の模様があしらわれた着物を着た遊女は、つぶし島田を結っている。見世に出るための化粧であるが、左腕に結ばれた豆絞りの手ぬぐいの下には、思い人の名の刺青が入れられているのだろう。

26番



歌川国貞（三代豊国）・二代歌川国久  
江戸名所 百人美女 今川はし  
1858年

「江戸名所百人美女」は、国貞が江戸時代の女性風俗を国久が描いたコマ絵の地名に関連づけて描いた揃い物で、大名の姫君や遊女、町人の妻など様々な階層の女性が描かれている。コマ絵に描かれているのは、「今川はし」。今川橋とは、天和年間（1681-83）に龍閑川を渡るためにつくられた橋で、日本橋と中山道を結んでいた。今川橋は、1950（昭和25）年に龍閑川が埋め立てられる際、解体された。金盥の水が龍閑川、梳る櫛が今川橋に見立てられているのだろうか。着物が濡れないように、上半身裸で洗髪する女性。亀甲繫ぎ模様の着物に麻の葉模様の絞りの帯を締めている。女性の傍らには糠袋、櫛はらい（櫛の汚れを取る刷毛）、梳き櫛、手拭といった洗顔と洗髪に使う道具が置かれる。糠袋は洗顔のために使われたもので、これを使って洗顔すると美白の効果があったとされる。

31番

歌川国芳  
縞揃女弁慶 自剃り  
1845年頃

「縞揃女弁慶」は、当時流行していた弁慶縞の着物を着た美人が、武蔵坊弁慶の逸話に絡んだ仕草をするという10枚の揃物。弁慶縞は、縞柄の一種で、2色の色糸を縦横双方に用いて同じ幅の碁盤模様に織ったもの。歌舞伎の「勧進帳」に出てくる、山伏姿の弁慶の衣裳に由来する。紺屋に生まれた歌川国芳は、着物の柄への関心が強かったといわれている。

讚は「父と師の 名をあはせ砥に あらためて むかふかゞみや 武蔵野ゝ月 宝珠亭舟唄」。鏡箱の前で、中剃りをしている若い女性。中剃りは少女や若い娘の習慣だった。中剃りという娘の仕草は、7歳で比叡山に登った弁慶が、乱暴が重なり追放された後、自剃受戒し武蔵坊弁慶と名乗ったという故事に因んでいる。

32番

**溪齋英泉**  
**今容姿 歯みがき**  
**1830-44年**

眉の剃り跡が青々とした若々しい人妻が、鏡を見ながらお歯黒で染めた歯を房楊枝で磨いている。髪は、しのじ髷に結っている。襟と袖の模様が異なっているので、半襟を付けていることがわかる。半襟をつけることで、着物と襟の組み合わせを楽しんでいたのである。房楊枝の先端には、大小の房がついており、細かい歯間まで磨くことができた。房が赤いのは、紅入りの歯みがき粉を使ったからだろう。若妻は左手に、紅色の袋に入った歯磨き粉を持っている。「梅見散」「梅紅散」「匂い薬歯磨」「丁子屋歯磨」「助六歯磨」「梅勢散」等、文化文政期にはおよそ百種類の歯磨きがあった。江戸っ子は、綺麗な歯へのこだわりが強かったようで、『嬉遊笑覧』には「歯磨き粉は江戸に優るものはない」と記されている。（『紅ミュージアム通信』26、2013年、伊勢半本店本紅事業部）

34番

**落合芳幾**  
**時世粧年中行事之内 競細腰雪柳風呂**  
**1868年**

明治初期の湯屋の様子。張り紙から風呂代が、大人一人四十文、子供は三十二文、乳飲子は二十四文であったことがわかる。画面左では、女たちが大喧嘩をしており、桶の中の子供が驚いて泣いている。春画の出版は、公に認められていなかったため、陰部は手や手拭、桶などで巧みに隠されている。頭に片手をあてて呆れている男は、三助である。三助は、男湯と女湯で入浴者の背中を流したりする他、風呂焚きや下駄係等もしていた。

浴槽は、左奥の赤い囲いの中にあつた。囲いに描かれているのは、川で洗濯する娘の脹脛に目がいってしまい、神通力を失って雲から落下した久米仙人か。湯上りの客の足の水気を払うため、脱衣場と洗い場の境には竹が敷き詰められている。当時、体は米ぬかを入れた布製の糠袋で洗っており、使用済みの糠は、糠箱に捨てていた。画面奥には、糠が入った「ぬか箱」が描かれている。

35番

## 猫

### 初代喜多川歌麿 化け猫の夢を見る丁稚 1794 - 95年頃

商家の丁稚が座ったまま居眠りをしているところに、娘がいたずら書きをしている。行灯を持ってきたおかみさんが、思わずくすりと笑う。丁稚が見ているのは擬人化された猫の夢。どことなくなまめかしいポーズをとる猫は、手ぬぐいを吹流して被り、蛇の目傘をさしている。その風貌から、夜鷹と呼ばれる街頭で春を売る下等の私娼と見える。猫は私娼の隠語でもある。夢の中で娼婦に化けた猫が、丁稚を誘惑しているといったところか。寝言で、「ゴウゴウスウスウ かゝでかゞがさ いせさんど ヲいこれヲいこれ」と言っている。これは「加賀で加賀笠、伊勢参道（三度か）」と読めようか。加賀笠は、加賀国（現在の石川県）で産出された菅笠の一種で、格好が良く上物とされた。比丘尼という尼の姿で春を売った、夜鷹と同じく下等の私娼が好んで被っていた。歌詞のようにも聞こえ、伊勢比丘尼と呼ばれる遊女のことを唄った加賀節の一節なのかもしれない。

39番

### 歌川国芳 池の金魚とねこ 1851年頃

夏の日、三人の美人が池泉庭園を望む邸宅で納涼のひとときを過ごす。池には金魚が放たれ、涼を誘う。左の美人は黒ぶちの猫を抱えている。首玉をしていることから、大事に飼われていることが分かる。猫は池の金魚が気になってしょうがない様子で、肩の上によじ登っては覗きこもうとしている。胴の丸い金魚は、琉金かららんちゅうのようである。琉金は琉球から渡来したのでこのように呼ばれる。らんちゅうはお腹が大きく鞠に似ている姿から、江戸では丸子と呼ばれた。真ん中の団扇を持つ女性の着物には、二葉葵を变形したような紋が見られる。浮世絵において、二葉葵紋は笹竜胆紋と同じく、徳川将軍家を暗示する場合に使われることが多い（51番参照、前期に展示）。したがって、本図も源氏絵を意識した図様といえるのではないだろうか。

52番

## 歌川国芳

### 浮世四十八癖 はなしをきゝたがるくせ

1847-48年頃

いかにも噂話好きな女が興味津々といった面持ちで相槌を打ちながら、ご近所さんか誰かの話に聞き入っている。組んだ両手に挟んだ煙管を膝に立て、煙草を吸うのも忘れてしまっているようだ。傍らには二匹の猫。同じ赤ぶちなので親子か兄弟であろう。一匹が、もう一匹をペロペロと舐めて毛づくろいをしている。舌を使って古い体毛や汚れを取り除き、毛並みを整えているのだという。ちなみに、背後の長火鉢の端に渡した板を「猫板」という。寒がりの猫がここで丸まって暖を取るからこのように呼ばれた。

画中の書入れには、女の相槌が延々と記されている。「へえ、とんだねえ。へえ、さようかねえ。おやおや、けしからねえ。どうしたのでございますねえ。さぞ胆つぶしましたろうねえ。へえへえ、それからすぐにかえ。とんだことがあるものでございますねえ…（後略）」と、なかなか見事な聞き上手である。具体的な内容は判然としないが、相槌から想像するに、話し相手に起こった難儀や、善行を行った人の話、縁談が片付いた人の話などなどである。

53番

## 歌川国芳

### 嘘真言心之裏表 突然の進物

1847 - 48年頃

同一人物の心の裏表を、コマ絵と本絵で描き分けるという趣向で、コマ絵には真言（まこと、本心）を、本絵には嘘（建前）の言葉が記されている。コマ絵では、おかみさん風の女が困惑顔で、「どうしたのだろう、こんな魚をよこして」と、以前、どこかの家の娘の縁談の世話をしたのに、今まで挨拶もなかったことに対する不満と、突然お礼の魚を送られたことへの戸惑いが、延々と述べられている。一方、本絵ではニコニコとした笑顔を振りまきながら、「おおきにござろうさまでございますよ」「ようくお礼を申しておくれよ」など、魚を運んできた使いの人へのねぎらいや、送り主への感謝の気持ち、遠慮する素振りがつらつらと述べられている。傍らの飼い猫が、立派な伊勢海老に驚いたのだろうか、威嚇のポーズをとっている。真言の中で女は、「それぞれ、猫が気をつけなよ。」と、家の者に申し付けている。

55番

## 歌川国芳

### 妙でんす十六利勘 朝寝者損者

1846年頃

「妙でんす十六利勘」というシリーズの一枚。「利勘」は利益を勘定すること。これを仏教で聖者とされる「十六羅漢（らかん）」に掛けている。各図の掛軸風のコマ絵には、「尊者（そんじゃ、羅漢の尊称）」ならぬ「損者（そんじゃ）」が描かれ、それぞれの名前に関連した美人画を本絵に描く。ちなみに、シリーズタイトルの「妙」は、「素晴らしい」や「普通と違う」という意味のほかに、「妙」の字を分解して「少女」を意味するが、さらには「寺の囲い女」を示す隠語でもある。

本図のコマ絵は「朝寝者損者（あさねはそんじゃ）」。損者が手にするのは、貧乏神のアイテムとされる渋団扇。本絵には、胸元がちらりとほだけた色っぽい女が、房楊枝で歯を磨いている姿が描かれる。着物の裾にまとわりついているのは飼猫であろうか。怒ったような顔をしている。朝寝坊をした女にかまってほしいのか、それともお腹をすかせているのか。詞書には、早起きは一生の得であるが、朝寝や昼寝をする人は損じゃ、ともしっかりいっている。

56番

## 歌川国芳

### 名誉右に無敵左り甚五郎

1847 - 50年頃

タイトルの「左り甚五郎」とは江戸時代初期の伝説的な宮大工で、左ききであったためこのように呼ばれたといわれる。東照宮の眠り猫の作者とされるなど伝説的逸話が多く残り、講談、歌舞伎、落語などに取り上げられる。図の中央で聖徳太子像を彫る人物がその甚五郎であるが、実はこの絵の作者である国芳本人でもある。肩にかけた手拭いや座布団には、国芳のトレードマーク「芳桐紋」。傍らの三毛猫は猫好きで有名な国芳の飼猫であろう。地獄変相図のどてらは、国芳の愛用品として知られる。

国芳=甚五郎が作っているのは、唐子と鶏（下絵）、脱衣婆、唐獅子と白象、不動と制多迦・矜羯羅童子、関羽、吉祥天、羅漢、達磨、天女、福祿寿、白衣観音、釈迦、赤天狗・烏天狗の面、雷神、閻魔、仁王などの神仏像。これらは全て役者の似顔になっている。本図が刊行されたのは天保改革による出版規制後であるが、国芳は禁止されていた役者絵を神仏像に描き出すことによって、官権に対抗したのである。

57番

**歌川国芳**  
**流行逢都絵希代稀物**  
**1847-48年頃**

大津絵に絵師の魂が入り込み、絵からキャラクターたちが抜け出した。シルエットのみが残った紙がひらひらと舞い、絵師の顔を隠す。大津絵は近江国（現在の滋賀県）大津で売っていた土産物の絵で、江戸時代においては岩佐又兵衛が大津絵の元祖と考えられていた。しかしながら、図中の絵師は又兵衛ではなく、前図（57番）同様、国芳本人。トレードマーク「芳桐紋」の団扇と傍らの三毛猫で、それと分かるようにしている。猫は空中の紙が気になって体を伸ばしている。

図中に描かれた大津絵の題材は、瓢箪鯰、雷の太鼓釣り、鷹匠、槍持ち奴、大黒の梯子剃り、牛若丸、鬼の寒念仏、酒飲み奴、釣鐘弁慶、藤娘、座頭。これらもまた、当時禁制の役者似顔絵である。大津絵の特徴である奔放な筆致と素朴な色彩を、国芳はあえて真似て描いている。

58番

**歌川国芳**  
**風流六花撰**  
**百合**  
**1843年頃**

花と美人を組み合わせるシリーズの一枚。タイトルの「六花撰」は、平安時代の『古今和歌集』に記された六人の優れた歌人を示す「六歌仙」になぞらえているのだろう。風流な六種の花、すなわち優美に着飾った六人の美女たちという趣向である。本図は余白部分に、唐風の豪華な花瓶に活けられた大輪の百合の花を描き入れる。

美人は一匹の猫を抱いている。猫は美人の肩にしがみつくようにして、足はもがいているように見える。あるいは、つややかに光る簪が気になるのかもしれない。首玉には鈴がぶら下がり、この美人の飼い猫であることが分かる。美人の足元にはもう一匹の猫がやってきた。同じ赤ぶちであるので、二匹は親子か兄弟であろう。「シャー」と鳴いて威嚇するようなポーズをとっている。子を取られて怒っているのか、それとも自分も抱っこしてもらいたいのだろうか。美人はこれに気付いて、語りかけているかのような表情を見せる。

61番

歌川芳春  
深川仮宅全盛揃 岡田屋内喜代川  
1865年

1862（文久2）年、江戸吉原の京町一丁目から出火、廓は全焼、深川に仮宅が設けられた。仮宅とは、吉原の遊女屋が火災などの際に、遊郭外で家を借りて臨時に営業することである。図は、岡田屋の遊女喜代川が、紐で飼い猫をじゃらして遊んでいるところが描かれる。猫は、紐を蛇か何かと思っているのであろうか、恐る恐る片手を出し、体は威嚇の体制である。奇しくも傍らの急須が載った火鉢は獅噛（しがみ）火鉢といって、脚部分に獅子が威嚇しているような姿が意匠化されているものである。喜代川の着物は、蝶とタンポポの大胆な柄である。黄色のタンポポに混ざって黒いタンポポも見受けられるが、江戸時代において、タンポポは園芸植物として愛好され、多くの品種が栽培されていた。

62番

葛飾北斎  
北斎漫画 十四編  
19世紀中期～後期

『北斎漫画』は全15編からなる版本で、絵を学ぶ人のための絵手本として制作された図案集である。図の総数は三千数百におよび、その一つ一つに北斎の鋭い観察眼が発揮されている。内容は、動植物、市井の人々の営み、人体ポーズ、名所風景、建築物、説話、自然現象など多方面にわたる。

本図は猫と狼の図。右図のぶち猫は仕留めた鼠をくわえ、鋭い爪をぎらつかせている。首玉をしているので飼い猫ではあるが、顔つきは野生の本能まるだしである。猫は古くから人家において、穀物などを鼠の害から守るために飼われていた。日本に渡来したのは奈良時代頃で、一説には仏教伝来の際、経典を鼠から守るために一緒に連れてこられたといわれている。

左図の月を背にした狼は、後ろ足で首元を搔くようなしぐさをしている。野犬のようにも見えるが、狼と野生化した犬はしばし混同され、「やまいぬ」とも呼ばれた。かつて日本には固有種としてニホンオオカミが存在していたが、明治時代末期に絶滅した。

65番

## 歌川国芳

### 朧月猫の草紙 三編、四編、六編

1845, 1846, 1848年

戯作者山東京山作、国芳画の『朧月猫の草紙』は、1842（天保13）年より刊行された、猫のこまが主人公の合巻である。京山と国芳はどちらも猫好きで知られる。鯉節問屋又たび屋の飼い猫こまが、恋猫とらと駆け落ちするもはなればなれに。こまはお屋敷で拾われ撫子姫の寵愛を受けるが、粗相をして追い出され、あげくに川に落ちてしまったところを漁師に救い出され…といったように波乱万丈の物語が展開する。

#### 【三編表紙】

左の娘はこまが人間に化けた姿で、本当の顔が水面に移っている。菓子屋の丁稚二九蔵を襲って、愛しいとらの仇を討つ。

#### 【四編表紙】

再び撫子姫の屋敷に戻って寵愛を受けるこま。水盤の金魚にちょっかいを出そうとしている。

#### 【六編表紙】

撫子姫から中老格と「尾の上」という名前を賜ったこま。姫の叔母が贈った「ぶち岩」という猫と陰悪になり、鮑の殻を打ちつけられる。これは、歌舞伎で有名な「草履打ち」のパロディ。

59番a-c

## 歌川国貞（三代豊国）

### 源氏六條の花

1854年

桜咲く春の庭園。寝殿の御簾の前に紐をつけた猫を連れた美人が現れた。庭の若侍が扇をかざしながら、こっそりと見つめている。人物は当世風に描かれるが、平安時代の長編『源氏物語』に出て来る女三の宮と柏木である。女三の宮は朱雀院の第三皇女という高貴な身分であるが、院のはからいで光源氏に降嫁した。このため、図では姫様風の豪華絢爛な装いであるが、既婚者を示すお歯黒をつけている。

ある春の日、光源氏の邸宅六条院で公達が集まり蹴鞠に興じていると、女三の宮の飼い猫が御簾から飛び出し、その姿が露わになってしまう。これを見た柏木は、かねてから思いを寄せていた女三の宮にますます恋慕を募らせ、とうとう強引に迫って結ばれる、というあらすじである。



浮世絵においては、当世風の美人を女三の宮に見立てた図様が多く描かれる。本図は、江戸時代後期の合巻『偽紫田舎源氏』を踏襲した図様となっており、『源氏物語』の世界を室町時代に移して翻案、一世を風靡した。庭の石橋にいるのは、その主人公足利光氏。

50番

月岡芳年

風俗三十二相 うるささう 寛政年間処女之風俗

1888年

江戸時代から明治時代にかけて、様々な女性の風俗を描いたシリーズ「風俗三十二相」からの一枚。三十二相とは、本来、仏が備えている32の優れた外見的特徴のことであるが、転じて女性の美相を表す。題名に「うるささう（煩そう）」とあるように、猫が飼い主に抱きつかれて煩わしそうな表情を浮かべる。飼い主の娘は、裕福な商家の娘といったところであろうか。寛政期（1789-1801）に流行した燈籠鬢という両鬢を張り出させた髪型で、赤い手絡を前髪にかけ、花飾りの簪を挿している。飼い猫が可愛いといった様子で、舌で音を立てながら、猫の首の辺りを指でくすぐるようなしぐさを見せる。猫の首玉は、娘の襦袢とお揃いの布で作られており、大きな鈴がぶら下がっている。

63番

犬

鈴木春信

風流五色墨 蓮之（あさがおや）

1769年頃

縁側で美人が房楊枝を使って歯を磨いている。傍らには、黒い洋犬がちょこんと座っている。猫のように首玉が付けられているので、この美人の飼い犬であることが分かる。洋犬は戦国時代の南蛮貿易によって日本にもたらされ、舶来の犬を意味する「唐犬」と呼ばれた。はじめは大名など権力者への贈り物であったが、次第に市井の富裕層の間にも広まっていった。特に小型犬は大奥や大名の奥御殿の女性たちに愛玩され、また、遊女や妾のなぐさめ草にもなった。庭には蔓を竿に絡ませた朝顔が咲いている。美人の着物の雪輪模様と開花した朝顔の花びらが、相乗効果的に夏の朝の清々しさを演出していよう。画面上部の雲形には、蓮之が詠んだ「あさがほや不断見てみる顔も切（さて）」の句。蓮之は江戸時代中期の俳人で、1731（享保16）年、仲間とともに編纂した俳諧集『五色墨』に掲載されている。

66番

**歌川国貞（三代豊国）**  
**星や霜当世風俗 子守り**  
**1820年頃**

女性の何気ない日常の一コマを描いたシリーズの一枚。各図に八花形と呼ばれる花卉のような八つの角を持つ意匠の題名枠を配す。「星や霧」は、星霜のことで年月を意味することから、「星霜を経た当世の風俗」を描いた図という趣向であるといわれている。

本図は、子守をする若い娘にぶち犬がじゃれつく姿を描く。前垂れと着物の裾がめくれ上がり、生白い足首がちらりとこのぞく。あどけなさをいまだ残す娘のさわやかな色気が描き出されている。

背中におぶった子どもは、犬が気になっている様子である。男児であろうか。三柙つなぎの模様の着物を着ているが、これは荒事で知られた市川団十郎にあやかり、力強く丈夫に、という願いが込められているのだろう。また、赤色は疱瘡除けの効果があると信じられていたという。奴と呼ばれる両耳の上を剃り遺した髪型で、赤い紐でくくられている。

69番

**歌川国貞（三代豊国）**  
**春交加 鳥をひ**  
**1820年代初期**

題名の「交加」とは「ゆきかい」（行き交うの意）とも読ませる。すなわち往来のこと。新春の往来に現れる大道芸人をコマ絵に描き、これに関連する美人画を本絵に描いたシリーズの一枚である。ちなみに、コマ絵の枠は国貞の「貞」の字を三柙風にしたデザインになっている。本図は、玄関にやってきたぶち犬を描く。「犬ころが来たよ」といって、抱いた幼子に見せる母親。野犬でも飼い犬でもない、いわゆる「町犬」という地域ぐるみで世話を受けている犬であろう。礼儀正しく座っている。コマ絵には、門付け芸の一つである鳥追いを描く。新年に女太夫が新しい着物と編み笠姿で家々を回り歩き、三味線を弾きながら鳥追い歌を歌って金品をもらい受けた。門付けをする鳥追いと、餌をもらいに来た犬を結びつけている。

71番

溪齋英泉  
当世好物八契 里見八犬伝  
1823年頃

様々な女性を描き、画中の上部に彼女たちの好物を配したシリーズで、「八契」は「近江八景」をもじる。前髪に手絡をかけた若い娘が、肩に乗った飼い犬の狛と一緒に手にした文をじっと見つめている。唇には笹紅と呼ばれる、当時流行の青光りする口紅をさしている。娘の好物は、図の左上に描かれた草双紙。表紙に「街道茶漬」とあるのは、東里山人作、1824（文政7）年に刊行された『海道茶漬腹内幕』である。英泉が画を担当しており、これは宣伝を兼ねていよう。その下にあるのは、曲亭馬琴作、1814（文化11）年より刊行の『南総里見八犬伝』である。安房の豪族里見家の興亡を背景に、八犬士が活躍するというストーリーである。

74番

歌川国芳  
春の夜  
1843-45年

春の夜、一人の女が、物思いにふけた様子で街頭に立つ。右手で左の袂をつかみ、斜め上を見上げるようなしぐさをとっている。今宵の朧月を見上げているのであろうか。それとも、ほのかに漂う梅の香りをかいでいるのだろうか。ぶちの野犬が何食わぬ様子で通り過ぎる。画中に記された和歌は、芝三島町に住む戯作者の立亭京楽による。「白梅（しらむめ）と若ねとあちら東風（こちかぜ）に袂薫（たもとかほら）す朧月（おぼろづき）の夜」。若音とは、まだ成熟しきらない鳥のたどたどしい鳴き声のこと。東風は春に吹く東の風のこと、「あちらこちら」に掛けている。着物の袂の香りは、女自身のものか、それとも触れ合った誰かの移り香であらうか、などといった想像がかきたてられるような歌意である。

73番

歌川国丸  
湯屋の前  
1818 - 30年頃

雪の湯屋の前に女が三人。それぞれ、「門之助きどり」「糸三郎きどり」「菊之丞きどり」と記されている。歌舞伎役者をきどって（真似して）、という趣向である。二匹の愛らしい子犬が見つめている。人気役者の装いは、当時の流行に多大な影響を与えた。特に女形の役者は、市井の女性のファッションリーダーでもあった。三代目瀬川門之助の定紋は四つ紅葉で、舞台上でも紅葉柄の着物を好んで着た。右図の女性も内側の着物が紅葉柄になっている。二代目岩井糸三郎は、1825, 26（文政8, 9）年頃、舞台上で絳縞模様をよく着た。中図の女性の着物が絳縞である。左図の女性は、帯を路考結びにしている。結んだ形が「や」の字になる結び方で、二代目瀬川菊之丞が考案した。本図が描かれたのは、五代目菊之丞が活躍していた時代である。口にくわえているのは、お風呂で使う糠（ぬか）袋であるが、女形が額につけた紫帽子にも見える。

一般女性が湯屋の前で役者のようにキメのポーズ、という体裁であるが、顔をよく見れば各役者の似顔絵。湯屋の入口に書かれた「女湯」「男湯」の文字も、女形を示唆的に表している。

70番

## セクション2

金魚

初代喜多川歌麿

夏

1789-1801年

涼をとるため胸元を大きく寛がせる母親と、金魚が泳ぐ水盤に思わず手を入れる童子が描かれている。金魚の飼育は当初上流階級だけの楽しみであったが、金魚の繁殖や飼育方法が広まるにつれて江戸庶民の日常生活に溶け込んでいった。夏から秋にかけて、金魚売りが「目だかア、金魚ウー」という独自の節をつけ振り分けた桶を担いで町中を売り歩く様子は、夏の風物詩の一つであった。金魚の価格には大きな幅があり、高価なもので金3両から5両したのに対して、行商や縁日で売られている金魚は子供のおもちゃ程度であった。江戸時代の金魚飼育書によると、餌には糸ミミズが最適でほかにもぼうふうら、そうめん、玉子の黄身などが紹介されている。

78番

初代歌川豊国

二代目尾上松助の金魚屋金八と初代市川市蔵の浮世床の股平

1814年

江戸も後期になると金魚は庶民の間に浸透し、町中を往来する金魚売りから気軽に金魚を買うことができた。一般に金魚売りは夏に限られた商売で、夏が近づくと浅桶を担いで行商を初め、秋風が吹き始める頃に姿を消した。本図は1814（文化11）年3月から中村座で上演された「花雲病色衣（はなのくもやよいのいるごろも）」の一場面。右は二代目尾上松助（1784 - 1849）が演じる金魚屋（売）金八と、左に初代・市川市蔵（1777 - 1827）が演じる浮世床の股平が描かれている。金魚屋（売）金八については、先行例として1780（安永9）年に勝川春好の画で初代・尾上松助が演じる役者絵がある。上方では金魚売の服装は必ず白木綿の手甲脚絆甲掛をして、金魚桶の上に柳合利（行季）を置いて旅人のような姿と決まっていた。一方、江戸ではこうした決まりはなく自由な服装であった。金魚売りは江戸っ子にとって比較的新しくて華がある、女性ウケのする職業だったのかもしれない。手桶の提手部分には、金魚を入れた金魚玉を吊しているのが見える。

80番

**歌川国芳**  
**見立夏景色**  
**1840年代初期**

当世の人気役者を、夏の物売りに見立てた作品。左の金魚売りは四代目中村歌右衛門（1798-1852）で翫雀は俳名。金魚玉にはそれぞれ2、3匹の金魚が入っており、細く上に伸ばした口を紐で縛って吊している。客と相談しながら網ですくい取り、どんぶり状の器でじっくりと品定めをしてから売り渡すのであろうか。右の水売りは十二代目市村羽左衛門（1812 - 51）で、俳名は家橘。歌舞伎の中で往来の物売りを模した物売物（ものうりもの）という舞踊があり、1804-30年（文化文政期）頃に変化舞踊が流行したことで、様々な物売りが舞台に登場するようになる。国芳の画師である豊国が同様の趣向で文化期に描いた《諸商人》五枚続では、物売りとして地紙売り、水売り、虫売り、団扇売り、植木売りが取りあげられた。

87番

**菊川英山**  
**金魚鉢を見る母子**  
**1804-18年**

金魚の飼育は元禄時代に最初の流行が始まり、その後大小の流行を繰り返し文化文政期から天保にかけて大流行した。母子で金魚鉢を眺める姿は江戸後期にはしばしば見られる主題であり、金魚の飼育が庶民の日常に広く行き渡った事を示している。江戸時代に書かれた金魚飼育書は約20冊が確認されており、1810（文化7）年とその翌年には3冊が発行された。1930年に刊行された『金魚の飼い方』によると、安永から天明頃に旗本御家人が深川および本所付近の屋敷内で金魚の養殖を行い、町人に払い下げて儲けていたという記述があり、未だ解明されていない江戸の金魚の流通を考えるうえでの手がかりとなっている。背中の子供は疱瘡避けの縁起物である角頭巾を被り、守り袋の一部が背中から覗いている。母と子のほほえましい日常が描かれた一枚である。

83番

## 歌川国芳

### 源氏模様娘雛形 浜名宗清、桂木、氏尚、紅梅

1851年

1851（嘉永4）年9月、市村座で上演された「源氏模様娘雛形（げんじもようむすめひながた）」を描いた作品。この演目は、柳亭種彦が14年に渡り執筆した合巻『修紫田舎源氏（にせむらさきいなかげんじ）』（歌川国貞画）を劇化したもので、この時の一場面がのちに「田舎源氏」と呼ばれる舞踊劇の原型となる。

『修紫田舎源氏』は1829（文政12）年から1842（天保13）年にかけて刊行された大人気小説で、第38編まで刊行された。同書は天保の改革によって処罰され、その後作者の死去により未完となった。国貞は主人公の光氏を描く際に、茶筌髻の先端を二つに割った「海老茶筌髻（えびちゃせんまげ）」という髻を考案し、この演目でもそのスタイルが踏襲された。右の浜名宗清が肘をついているのは、歌川国芳作「今様伊勢物がたり」84番（前期に展示）でも描かれた大型水槽である。実在したかどうかは別にして、金魚が数匹悠悠と泳ぐことができる大型の水槽は、富と権力の象徴として用いられているようだ。

86番

## 歌川国貞（三代豊国）

### 曲水遊覧之図

1852年

満開の桜を背景に、曲水の上流から流れてくる酒入りの杯を受け取ろうとする男たち。その様子を、艶やかな衣裳を着た男女の一団が見守っている。曲水宴は中国から伝わり、上巳（3月最初の巳の日）に行われる宮中の儀式であった。庭園内の流れがある曲水に面して座し、酒が入った杯が自分の前を通り過ぎる前に詩歌を詠み、杯の酒を飲んで再び杯を流す。しかし、この図で流れてくる杯を取ろうとしているのは、詩歌とは縁がない酒目当ての従者たちである。川辺に立つ金魚柄の上衣を着た男性は、「海老茶筌髻（えびちゃせんまげ）」から判断して『修紫田舎源氏』の主人公・光氏である。姫や奥女中と共に花見見物に訪れたという設定であろうか。本図は『修紫田舎源氏』のあらすじとは関係なく、人気キャラクターである光氏を用いた派生的な作品であり、「源氏物」と呼ばれている。

88番

**歌川国貞（三代豊国）**  
**源氏十二ヶ月之内 水無月**  
**1856年**

水無月（6月）は旧暦の7月頃にあたる。空が突然黒い雲に覆われ、大粒の雨が降り出したところであろうか。往来を歩いていた人々が一時巨木の下に集まり雨宿りをしている。身分や職業も様々な人物が描き分けられているのが本図の面白さである。右の一行は合巻本『倭紫田舎源氏』に登場する人気キャラクター・光氏とその従者。左の飛脚と子供を背負った女、僧侶は止む気配がない空を不安気に見上げているが、振袖姿の娘は光氏の姿が気に入り、心ここにあらずの様子。そのお付きの女中は、金魚売りの若者と何やら視線を交わしている。金魚売りが竿に付けた金魚玉は、フラスコのように口を立ち上げず、上部の穴に横棒を渡して留める形である。

89番

**歌川貞秀**  
**横浜ノ商館ニ佛蘭西人金魚ヲ翫ブ図**  
**1861年**

1858（安政5）年、米国および英国、フランス、ロシア、オランダと修好通商条約を締結した江戸幕府は、箱館（函館市）・神奈川（横浜市神奈川区）・長崎・兵庫（神戸市兵庫区）・新潟の5港を開港し、その地での外国人の居住と貿易を認めた。横浜の山下町を中心に設けられた山下居留地には当初は50名近い外国人が居住し、63年には西洋人だけでも約170人がいたとされる。仏蘭西（フランス）人の割合は定かではないが、英国人がその半数を占め、次いで米国人が多かった。金魚が欧米へ初めて持ち込まれた時期は、諸説あるなかで1611年のオランダという説が最も早く（鈴木克美『金魚と日本人』）、この作品が描かれた時期には欧米でも東洋の愛らしい小魚の存在は一部の人に知られていた。

91番



## その他の動物

### 歌川国芳

本朝廿四孝 孝子与次

1843-45年頃

図の男は、人形浄瑠璃「近頃河原達引（ちかごろかわらのたてひき）」の登場人物で、京都の堀川に住む猿廻しの与次郎。大道芸で細々と生計を立てながら、目の見えない母の看病をしている。妹は祇園の遊女で、伝兵衛という恋人がいる。1782（天明2）年に初演され、のちに歌舞伎化される本作品は、「お俊伝兵衛」の通称でも知られる。京都で実際に起こった心中事件、四条河原で起きた公家侍と所司代家来の喧嘩、親孝行な猿廻しが表彰を受けた話、これらをもとにして脚色された。

なかでも、与次郎の孝行話に取り入れられた「堀川猿廻しの段」は特に有名で、今日でもしばしば上演される。お俊の気持ちを知った与次郎と母は、心中すると知りながらも、はなむけにと猿廻しでお俊と伝兵衛を見送る。傍らで芸を見ているのは、与次郎の母に三味線を習いに来ている近所の娘であろう。

97番

### 歌川国貞（三代豊国）

蘭船 舶来鳥 ギヤマン燈籠

1819年

1819（文化2）年、江戸両国にてギヤマン（ガラス）細工の見世物が興行された。阿蘭陀船、大燈籠の細工とともに陳列されたのは、生き物の九官鳥・インコ・鸚鵡（おうむ）。いずれも舶来種で、人の言葉や物音を巧みに真似する鳥として珍しがられた。右の九官鳥は、別名「秦吉了（さるか）」とも呼ばれ、「九官」は本種を持ち込んだ中国人の名前に由来するという。真ん中のインコは、猩々（しょうじょう）インコと呼ばれる紅色のインコ。左の鸚鵡は、「コバタン」と呼ばれる全長40センチメートル前後の白色の鸚鵡である。鳥類に限らず舶来の珍しい動物は、はじめ、ヨーロッパやアジア各国から権力者への献上品、あるいは商品として日本に持ち込まれたが、のちに、寺社の境内や盛り場で料金を取って見せる見世物興行での出し物としても輸入・飼育されるようになった。一方、カナリアや文鳥は舶来種ではあるが、早くから輸入され、市井の鳥屋で売られており、庶民でも気軽に飼うことができた。

95番

## 無款

### 紅毛渡り ミノカケラクダ

1867年

1867（慶応3）年、大坂難波新地におけるフタコブラクダの見世物の際に、興行主が出した報状である。全長1丈3尺8寸余（約4メートル）、体重600貫目（2トン以上、実際はこの4分の1程度）、首の長さ9尺余（約3メートル）とある。また、口上には、次のような内容が述べられている。この度、オランダ船で渡来した珍しいもので、以前、お見せしたラクダとは別のものである。顔が雪のように白く、頭に黒く長い毛がある。首のまわりに3尺余り（約1メートル）の蓑（みの）のような毛が垂れていることから、「ミノカケラクダ」と呼ばれる。後の方にある息抜きの穴は、蓮の実にそっくりである。毎年、全身の毛が生え替り、毛色は様々であるが、特に春期は比べようもないほど格別な色である。（後略）ラクダのこぶの間に乗るのは、唐子風の少年。前座として、唐人踊りが披露されたという。この時の札銭（入場料）は、入口で72文（かけそば3杯分）、さらに中にて24文（のちに12文が追加）取られたが、大入りであったという。

102番

## 四代歌川国政

### しんさく はうた

1865-68年

図はうさぎ絵と呼ばれるもので、擬人化されたうさぎの恋人たちがしっぽりとしたひとときを過ごす様子が描かれている。雄のうさぎが三味線を弾きながら歌うのは、江戸時代末期から明治初期にかけて流行した端唄（はうた）。

1872（明治5）年頃から、投資としてのうさぎブームが起こった。売買の市が立ち、鑑定会が催され、変わった毛色のものは高額で取引された。これに便乗しようと、市民の間でも大量にうさぎが飼われた。しかしながら、翌年、うさぎ市が禁止されると、熱狂ムードは沈静化し、破産する者も続出した。その悲喜こもごもは、うさぎを擬人化した風刺画として表されるようになった。

画中に記されるのは有名な端唄「金時」と「惚れて通う」の替え歌で、歌詞にはうさぎの仲買人が奔走する様や、人気のあった赤毛のぶちのうさぎが大いに飼育されたこと、より良いうさぎを探し求めたり沢山繁殖させたりする奮闘ぶりが唄われている。

100番

歌川国貞（三代豊国）  
東海道五十三次之内 蒲原図  
1830年代前半

美人画と宿場の風景を組み合わせた国貞（三代豊国）の東海道五十三次シリーズ。美人の背景の風景画は、広重が1833（天保4）年頃に刊行した保永堂版「東海道五拾三次之内」より借用している。牛に乗った洗い髪の美人は当世風に描かれているが、これは七夕伝説における牽牛の牛に乗った織女の見立絵ではないだろうか。雪降る夜空を、天の川になぞらえているように思われる。

日本において、牛は古代から飼育されており、もっぱら耕作や運搬などの作業に使用されてきた。平安時代においては、牛に屋形をひかせた牛車が、主に貴族の間で盛んに用いられたが武家社会に入ると次第に衰退した。

浮世絵の画題としては、やはり村落における描写が多く、草刈童に身をやつし山路と名乗った花人親王（のちの用明天皇）が牛に乗って長者の娘を思って笛を吹く「山路が笛」や、あるいは黒木を頭に載せた大原女が牛を引く姿に表される。そのほか、天神の使いとしてや、江ノ島詣での乗物としても登場する。

## セクション3

### ソウルフード

葛飾北斎

東海道五十三次 絵本駅路鈴 桑名・四日市

1810年頃

伊勢国桑名宿（現在の三重県桑名市）は伊勢湾に面した城下町で、東海道随一の海上航路である七里の渡しの船着き場として栄えた。図は、「その手は桑名の焼き蛤」という言葉遊びで知られた名物焼き蛤を描く。焼き蛤は桑名から四日市に向かう途中にある小向（おぶけ）や富田辺りの茶店が評判で、図のように火鉢を店頭に置き、松ぼっくりや松の葉で蛤をあぶって旅人の食欲を誘った。桑名はまた時雨蛤も有名で、これは蛤のむき身を生姜や山椒とともにたまり醤油で佃煮にしたものである。一説に、時雨の降る初冬が蛤のおいしくなる時期であることから、このように呼ばれたという。

次の四日市宿を京都方面へ進む途中、伊勢参宮道の分岐点である日永追分に至る。図の標石には「追分 参宮みち」と記され、傍らには大鳥居と常夜灯が見える。ここから多くの参詣客が伊勢へ向かった。沿道の茶店には「名ぶつ まんぢう」の看板がかかっており、饅頭で旅人をもてなしたことがうかがえる。

108番a, b

月岡芳年

風俗三十二相 おもたさう 天保年間深川かるこの風ぞく

1888年

題名の「かるこ」とは軽子のこと、江戸深川の岡場所の仲居をこのように呼んだ。膳に盛った料理を重たそうに運ぶ姿が描かれる。深鉢には大豆が混ざった煮物のようなものが見える。奥の縁高と呼ばれる蓋つきの器には、口取り肴が入っているのであろう。

真ん中の大皿には刺身の紅白盛り。熊笹の搔敷（かいしき、食物用の敷物）に、赤身と白身を交互に並べ、薬味が添えられる。赤身の魚は鰹（かつお）か鮪（まぐろ）であろう。江戸時代を通しては、もっぱら鰹が好まれた。鮪は安っぽい魚とされ、そもそも客には出すものではなかった。しかしながら、この図に描かれた天保（江戸時代後期）の頃、鮪が大量に獲れるようになり、次第に店でも提供されるようになった。刺身の調味料としては、鯛や鰯などの白身魚には辛子味噌やわさび醤油が、赤身魚には大根おろしが好まれた。その他、ツマとして、大根

やうどの細切り、生海苔、生防風（ぼうふう、セリ科の植物）、蓼（だて）、食用菊、オゴノリ（海藻の一種）などが添えられた。

103番

**歌川国貞（三代豊国）・歌川広重**  
**東都高名会席尽 まつのすし すしや娘お里**  
**1852年**

コマ絵の「まつのすし」は、浅草第六天神社近くの平右衛門町にあったすしの名店で、以前は深川安宅にあったことから、移転後も「安宅の松のすし」と呼ばれた（112番参照）。文化文政（1804-30）期頃、江戸で握り鮓が登場し、大流行。松のすしは、与兵衛すし、毛抜きすしとともに江戸三大すし屋と評された。猪口を入れた水盤や皿が載った盆の傍らに描かれた折箱には、握りすしや巻きすしが入っているのであろう。

役者絵は三代目岩井桑次郎のすしや娘お里で、コマ絵とは「すし屋」つながりとなっている。人形浄瑠璃や歌舞伎の傑作として知られる「義経千本桜」の三段目「すし屋の段」の登場人物である。平家の武将平維盛が弥助と変名して、かくまわれていた吉野のすし屋の娘。高貴な弥助に惚れたお里が弥助と、念願かなって内祝言をあげることになり、嬉しさのあまり積極的に枕を手にする様子が描かれる。

105番

**歌川国貞（三代豊国）・歌川広重**  
**東都高名会席尽 よし丁桜井 浅倉当吾**  
**1852年**

国貞が人物像を描き、背景のコマ絵を広重が描いた合筆シリーズ。コマ絵には江戸で評判の料理屋を表すモチーフが描かれ、これに語呂合わせなどで関連させた歌舞伎役者が描かれる。

コマ絵は瓢箪型に「よし丁」とあるように、江戸芳町にあった桜井甚五郎が店主を務める桜井を描く。桜形の枠では、中居が大皿に盛られた刺身を小皿に取り分けているところ。芳町は俗称で、日本橋の堀江六軒町と堺町横丁界限、現在の人形町の一角にあたる。寛政期（1789-1801）にはすでに有名店のひとつとして名を馳せ、文政後期（1818-30）に新たに新楼を建て、その大広間からの眺望を誇った。1859（安政6）年に刊行された江戸の料理屋番付「即席会席御料理」には西の関脇に順位づけられている。

役者絵は、四代目市川小団次の浅倉当吾。1851（嘉永4）年初演の歌舞伎狂言「東山桜莊子」の主人公。將軍家へ直訴に及んだ義民佐倉宗吾の物語に、柳亭種彦の合巻『偽紫田舎源氏』の一部を織り込んだ農民劇で、拷問の場や怨霊の仕掛けで大当たりした。タイトルの「桜」はむろん「佐倉」を示すが、これをコマ絵の「桜（井）」と掛けている。

115番

**歌川国貞（三代豊国）・歌川広重**  
**東都高名会席尽 浅草蔵前たが袖 八百やお七**  
**1853年**

コマ絵には浅草蔵前にあった料理屋誰袖（たがそで）の店先と、縁高と呼ばれる器に詰められた色とりどりの口取肴が描かれる。誰袖は隅田川西岸、幕府の米蔵や札差の店が立ち並ぶ蔵前にあった。前出の「即席会席御料理」には西の前頭に順位づけられる。口取肴とは、饗膳のはじめに出される料理のことで、肉・魚・野菜の甘煮や、かまぼこ、卵焼き、寄せ物（魚のすり身などを寒天や葛で寄せ固めたもの）などを盛り合わせる。現在のおせち料理の一の重に相当する。

役者絵は、三代目岩井柔三郎扮する八百屋お七が振袖姿で火の見櫓の太鼓を打つ姿が描かれ、「振袖」と「誰袖」を掛けている。お七は江戸本郷の八百屋の娘で、1682（天和2）年の大火で避難した檀那寺の寺小姓と恋仲になり、恋慕のあまり再開を願って放火、捕えられて火刑に処された。井原西鶴の浮世草子『好色五人女』で取り上げられ、以降、多くの文芸作品に脚色された。人形浄瑠璃や歌舞伎で演じられる際には、恋人の危機を救うため、振袖姿で火の見櫓に登るという演出がなされた。

116番

**歌川国貞（三代豊国）・歌川広重**  
**東都高名会席尽 甚左衛門町百尺楼 仲麿**  
**1853年**

コマ絵には、「御料理百尺楼」と書かれた行灯看板と燭台、大皿や膳の小皿には料理が盛り付けられている。百尺楼は日本橋甚左衛門町（現在の人形町と小網町の一角）にあった料理屋で、店名が示す通り、ひときわ高い建物だったのである。前出の「即席会席御料理」には西の小結に順位づけられている。

役者絵は、四代目市川小団次演じる安部仲麿。1852（嘉永5）年初演の歌舞伎「金烏玉兎倭入船」の登場人物で、奈良時代の遣唐使阿部仲麻呂がモデルとなっている。曆書を日本に持ち帰るため唐土に渡った仲麿は、玄宗帝に重用されるも悪臣たちに妬まれ、高樓に幽閉される。ついには失意のまま飢え死にするが、その霊が問罪使として日本より派遣された吉備真備の影身について助け、無理難題を解決して目的の曆書を日本に伝えることに成功するというあらすじである。仲麿が幽閉された「高樓」と「百尺樓」を掛けている。

117番

## 歌川国安 日本橋魚市繁栄図 1820年代後期

三枚続画面の近景に魚市の賑わいを描き、日本橋の雑踏を中景に、江戸城と富士山を遠景に配した。日本橋は江戸城外濠と隅田川を結ぶ日本橋川に架かり、東海道など諸国へ通じる街道の起点であった。また、付近は大商店や問屋が立ち並び、商業の中心地として繁栄した。この日本橋北詰の東側一帯には魚市があり、多くの鮮魚商が軒を並べて日銭千両の隆盛を誇った。天正期（1573-93）に摂津の漁民が移住して漁業に従事し、慶長期（1596-1615）頃、この地に魚市を開設したのが始まりといわれる。図には、鯛・鮑（あわび）・栄螺（さざえ）・烏賊（いか）・鰈（かれい）・蛸（たこ）・伊勢海老・鮪（まぐろ）など河岸から揚げたばかりの新鮮な魚介類を、店頭でさばいたり籠や盥に入れて担いだりする様子が描かれる。威勢よく天秤棒を担ぐ棒手振りが売り歩くのは鰹であろう。特に初夏の頃、いち早く漁獲した走りの鰹は「初鰹」といって、初物好きの江戸っ子の間で珍重された。

109番

## 歌川国芳 木曾街道六十九次之内 守山 1852年

歌川国芳の木曾街道六十九次は、コマ絵に宿場の風景を描き、これと語呂合わせなどで関連させた図を本絵とする。守山（現在の滋賀県守山市）は武佐と草津の間にある宿場で、コマ絵には木立の中を往く旅人が描かれる。本絵には蕎麦を食べる達磨大師が描かれ、積み上げられた「山盛」の蕎麦と「守山」を掛けている。描かれた場所は今戸から日本堤に入ったあたりであろうか。吉原通いと思われる頬被りの男性二人と座頭が行き交う。題名の枠と店内の提灯には達磨の払子（ほっす）、コマ絵の枠の形は玩具の達磨になっている。

蕎麦の歴史は古く、奈良時代にはすでに食用され、中世後期には本格的な栽培がなされていたようである。現在、蕎麦と呼ばれる麺は「蕎麦切り」と呼ばれ、江戸時代初期頃の考案といわれる。それ以前は蕎麦掻きにして食べていた。蕎麦切りは初め、菓子屋が副業で作っていたが、次第に専業の店が現れると普及に拍車がかかる。出汁、醤油、味醂など調味料が向上し、さらには薬味が工夫されると爆発的な人気を得た。図の薬味入れにも、刻みネギと大根おろしが盛られている。

121番

### 歌川国貞（三代豊国）

安宅の本店 平右衛門町 鮎松  
1852年

七男五女に恵まれ、自ら「子福長者」と称した五代目市川海老蔵が、深川木場の自宅「夜雨庵」で書画会を催している。扇に「暫」と書くのが海老蔵。長男の八代目市川団十郎は助六を描く。海老蔵門下の二代目市川九蔵は赤い短冊を手に思案中。女物の着物で盃を手にするのは三代目岩井柔三郎。その後ろは三代目嵐璃寛。扇に牡丹を描くのは海老蔵五男の三代目河原崎長十郎。その他も海老蔵の子で、揃いの「寿の字海老」柄の着物を着ている。

室内には、「上 安宅の本店平右衛門町鮎松 子福長者様」と書かれた進物用の掛紙が吊るされている。贈られたのはすしで、大皿には海老の握りずしや卵の巻きずしなどが葉生姜とともに盛られている。「鮎松」とは、浅草第六天神社前に店を構えた名店「松のすし（松がすしとも）」のことで、以前は深川安宅にあったことから、移転後も「安宅の松のすし」と呼ばれた。

112番

### 歌川国芳・歌川鳥女

芽出度図絵 まゝがたべたい  
1852年

諸国の名産物を生産・採取する様子をコマ絵に描き、これに関連する美人風俗画を描いたシリーズからの一図。「美作高田硯石」と書かれたコマ絵は、芳年の長女で絵師の鳥女（とりじょ）が手がけた。美作国（現在の岡山県）高田は硯石の名産地で、原石を採取する様子が描かれる。

武家風の婦人が、お団子状の食べ物が載った硯蓋と呼ばれる器を持っており、コマ絵の「硯」と結び付けている。よく見ると食べ物は細かい粒状で、炊いた米を



小さく握ったもの、あるいはついてから丸めたものであろうことが分かる。題名に「ままがたべたい」と幼児語が使われていることから、これは幼児用の食事であろう。着物や器の高級感から、格式の高い大名の奥御殿に仕える乳母が、お腹をすかせた若君にご飯を食べさせているところ、という設定であろうか。

122番

**歌川貞景**

**富くじ**

**1818-44年**

宴席の最中であろうか。遊女らしき女が懐紙を持って立つ姿が描かれる。床には、盃洗と呼ばれる盃を漱ぐための水盤と、料理を載せた盆が置かれている。大皿には、伊達巻やフキの煮物のような料理が色とりどりに盛られている。蓋つきの器には、肉・野菜・魚介の甘煮などの口取り肴が入っているのだろう。

右上のコマ絵には、小判を載せた三方（さんぼう）と呼ばれる角型の折敷を、袴姿の人物がうやうやしく持ってくる姿が描かれる。手前の羽織を着た男は、赤い札のようなものを持っている。隣の坊主頭が両手を差し出し、小判を受け取ろうとしている。右の赤い袴の男は、足がしびれてしまったのだろうか、足元をさすりながら顔をしかめている。これは、富くじの当選者が当選金をもらっているところではないだろうか。コマ絵の枠の裏には短冊がのぞき、「松の第当り」と読める。規模の大きい富くじは、松竹梅などの組に分けて売り出された。図は松の組に当選したという趣向ではないだろうか。本絵の女も思わず見入っている。

126番

**歌川芳虎**

**外国人遊興之図**

**1861年**

歌川芳豊作「アメリカ人遊里屋図」129番（前期に展示）同様、横浜港崎（みよざき）遊郭にあった岩亀楼（がんきろう）の扇の間を描く。岩亀楼は港崎で最大規模を誇る遊女屋で、牡丹・菊・梅・桜などの名前が付けられた各部屋は、名にふさわしい装飾が施された。扇の間は最上級の部屋で、末広がりという意味する絵扇の唐紙が部屋中を華やかに飾った。芸者の三味線に合わせて、亜米利加（アメリカ）人と南京（当時の中国の別称）人が陽気に躍る。開国により欧米諸国との貿易が始まると、その仲介役として多くの中国人も来日し、横浜・神戸・長崎などの外国人居留地に移り住んだ。

ダイニングテーブルには、英吉利（イギリス）人、阿蘭陀（オランダ）人、魯西亜（ロシア）人、仏蘭西（フランス）人が座り、食事を囲む。丸いものはパンか饅頭（まんとう）であろうか。舶来品と思われる珍しい瓶に入った酒も見られる。テーブル左側の二人は饗宴に花を添える遊女たち。港崎では外国人専用の遊女がいたという。右側の西洋婦人は、夫に伴い来日した奥方であろう。夫婦同伴の習わしに従い、遊郭にも登楼した。

128番

**歌川芳員**  
**横浜異人屋敷之図**  
**1861年**

外国人居留地の異人館の内部を描く。台所では料理人が大きな包丁で肉のようなものを切っている。おそらく外国人たちにとって入手しやすかった鶏肉であろう。文明開化以前の日本では、仏教の教えに従って四足の動物は食べないことになっていたため、食用の牛は飼育されていなかった。酒樽の下の竈の上に天板を載せて煮る、あるいは焼いている。調理台の手前には西洋風のストーブがあり、ここに柄付の深い鍋をはめ入れ、具材を調理している。奥の別室では、理容師が剃刀で髭を剃っている。シャンデリアが吊るされた居間では、ダイニングテーブルに大皿が並び、チェロの音が食事に華を添える。大きな丸い塊は外国人の主食であるパン。芳員は、大きな石窯でパンを焼く外国人の図もいくつか残している。様々な調味料が入ったガラス瓶のスタンドには、優雅な装飾が施されている。居留地に住む外国人たちが慣れない異国の地で、なるべく祖国の生活を再現しようと試みる様子が見えよう。

130番

**無款**  
**当世ごまのお萩**  
**1868年**

「京屋」の文字と「丸に錦」の紋が染め抜かれた暖簾の掛かる店内で、大きなすり鉢を大勢の男たちがゴマをすっている。彼らが作っているのはお菓子のおはぎ。台の上の皿には、お萩が五つずつ乗っている。幕末の京都で、「長州おはぎ」と呼ばれるおはぎが流行した。長州藩の城下町「萩」と「おはぎ」を語呂合わせにしたもので、藩主毛利家の家紋「一文字三星」に模して、盆の上に3つのおはぎを三角形に並べ、上に一文字を示す箸を置いた。禁門の変に敗れた長州藩を、陰ながら応援する心情が込められていたという。

図のおはぎはそのパロディであるが、1868（慶応4/明治1）年に勃発した戊辰戦争を風刺した図様となっている。「丸に錦」は新政府軍の旗を示す。ゴマをすっているのは、着物の柄や会話から判じて、薩長を中心とする新政府軍に追随する諸藩で、土佐、安芸、大垣、大村、阿波など。これを見ながら腕組をする長州藩は、「おれがすりばちを出しておいたから、みんなにたのむぜ」と得意げな様子である。

131番

**無款**

**骨抜どうせう なまづ大家破焼**

**1855年**

1854（安政2）年、江戸で巨大地震が起こった。市中の家屋が倒壊、また、30余箇所を出火し、死者数千人の被害を出した。当時の人々は、地震は鹿島神宮の要石（もしくは剣）によって普段は地中に押さえつけられている大鯰が動いて起こると信じていた。この俗説を受け、地震後にはこの大鯰を題材とした鯰絵と呼ばれる錦絵が大量に出回った。

本図もそのひとつ。露店で鯰をさばいているのは鹿島明神。多く被害を出した鯰に目打ちを刺し押さえつけている。鯰の口から出る火炎は、地震によって起こった火災を示す。地震と並んで恐ろしいものとされる雷・火事・親父は、退治される前に逃げ出した。看板の「骨抜どうせう」が示すのは、地震や火事で骨抜きになった（倒壊した）土蔵で、これらは江戸繁栄の象徴でもあった。「なまづ大家破焼」は、蒲焼きにこのような漢字をあて、火災で焼け落ちた家々を連想させている。傍らの人々は、芸者、三味線屋、噺家、呉服屋、料理屋、唐物屋など地震で被害をこうむった人々。余白には、彼らの嘆きの会話が記されている。

132番

**ガーデニング**

**歌川芳虎**

**流行菊花揃**

**染井植木屋金五郎**

**1844年**

菊細工のなかでも、菊で人や動物を象る菊人形は、水苔で根巻した小菊数本を束ねて、人形の骨組みにくぐらせるという仕組みで、興行中には根巻部分に水を与えて保たせた。この象の菊細工は、染井の植木屋伊藤金五郎が1844（弘化1）年

に見世物として制作したもの。当時の庶民が実物の象を見る機会はなかったと思われるが、出版物を通じて象の姿形は知られていた。手すり越しに喜ぶ女性二人は、それぞれ縞と格子の着物を着ているが、これは天保改革後の弘化期の美人画に頻出する模様で、とりわけ、この絵を描いた芳虎の師匠である国芳は、縞と格子の着物を着た美人画のシリーズを出すなど、時代性が反映されている。高さ3mとされているこの象は、菊の花のみならず、ところどころ葉がのぞいており、写実性が感じられる。

139番

**歌川国芳**  
**百種接分菊**  
**1845年頃**

文化（1804~1818）頃より巢鴨や駒込の植木屋を中心に可動式の菊人形など菊細工の見世物が行われるようになった。一時下火になったが1844（弘化1）年の染井での菊細工でブームが再燃し、以降数年にわたって巢鴨、染井の植木屋界隈にて菊細工の見世物が開催された。この「百種接分菊」は弘化2年の見世物として、「流行菊花揃」（139番）は弘化元年の見世物として確認でき、いずれも評判を呼んだ。この菊は駒込伝中の植木屋今（金）右衛門によるもので、一年草の菊に異なる種の枝を挿している。100種の名札が並ぶが、花は100以上あり、名称も実在と架空のものが混在していることが指摘されている。画面右下の男性が熱心に見入っているのは出品者と作品名を記した番付「新板改正造菊番附」で、これを片手に見て回ることができた。通常、見世物の番付は墨の一枚刷りだったが、この時は豪華な四枚一組の錦絵で出された。なお、同様の菊は後年、明治に至るまで作られており、根強い人気うかがえる。

137番

**歌川国貞（三代豊国）**  
**四季花くらべの内 秋**  
**1853年**

秋を代表する草花が所狭しと並ぶ。蝋燭に灯された火から夜の縁日の屋台を描いたものであろう。江戸時代、庶民が植木を購入する先としては、棒手振による行商、もしくは縁日にて植木売の構える屋台が主流だった。売られている鉢植えも様々で、棚の上には、釉薬で仕上げられた植木鉢に万年青や松葉蘭など絵でもわかるような高額商品が、棚の下には素焼きの鉢で小さな草花が売られており、植物と鉢の取り合わせ、棚の配置にも格が反映されている。さらに、地面には、女郎花や尾花（ススキ）といった秋の草花が根巻きの状態で置かれており、季節感

が感じられる。

棚の前には、右から三代目岩井柔三郎、八代目市川團十郎、初代坂東しうかが、芝居の役柄に扮していない地顔いわばプライベートの姿で描かれている。役者の名こそ記されていないが、各人が手にする紋入りのアイテム―杜若の団扇、三筋の札入れ、花勝見の鎖がついた鏡―と似顔からそれぞれの役者がわかるようになっている。

135番

## 二代歌川国盛

### 品川にてとうもろこし鶏に化したる図

1845年

1845（弘化2）年7月、品川の久兵衛宅のトウモロコシが鶏のように見えるとして話題になった。詞書によると、飼っていた鶏が死に、その死骸を庭に埋めたところ主人を慕って精霊が止まり、そこから生えたトウモロコシが鶏の頭の形になったという。実際には、カビ菌を原因とする黒穂病でできたコブだったが、同時期に芝新橋南大坂町の田中屋久蔵家でも、レンゲのような花が咲いたトウモロコシが見世物となり、久蔵が川口善光寺への参詣帰りに買った種を植えたところ、娘の新盆に、トウモロコシの上にレンゲの花がついたようになったという詞書を付した絵が出された。この2件のトウモロコシを描いた二代歌川国盛は、弘化期に人気を博した植物の見世物を数多く描いている。

140番

## セクション4

### 季節の祭り

#### 二代歌川国貞

梅蝶源氏 色紫五節句 初秋野風 七夕まつり

1858年

七夕（しちせき、たなばた）の節供は牽牛と織姫が会合する伝説と、乞巧奠（きこうでん）という手芸上達を願う中国の行事が奈良時代に伝来したものである。5色の色紙や短冊に文字の上達を願って和歌や句を書き記し、若竹の葉に結びつけて屋外に掲げた。本図では色紙や短冊以外にも、紙製の瓢箪や吹き流し、網飾りなど様々な装飾がつけられていたことがわかる。1833（天保4）年『世のすがた』によると「七夕の前短冊を売来るは、享和の頃はいる紙計を売、文化の頃よりさまざまの形を切て売、近頃は板行にて梶の葉盃などの形をおして切ぬき、十枚くらゐツゝ一束にして売、天保に至ては紙にて網を切、売来れり」とある。竹の高さも次第に高くなり、長竿の先に竹を結び付けるなどして、競うように空高く掲げられた。初秋の富士を背景にして、江戸の空に色とりどり七夕飾りが棚引いている景色は壮観で、歌川広重も本作の前年に《名所江戸百景 市中繁栄七夕祭》と題して描いている。左の短冊を手をしている男性は、『修紫田舎源氏』に登場するキャラクター・光氏。色好みで雅人という設定で、本編のあらすじとは関係なく同時代の錦絵にしばしば登場し、作品に華を添えている。

147番

#### 初代歌川広重

両国納涼大花火

1849-51年頃

両国橋の傍の船着き場に集う3人の女性。人混みを避け、船の上から思う存分花火見物を楽しむ算段であろうか。両国橋は、1957（明暦3）年におきた明暦の大火の後に墨田川に架けられ、以後は両国が納涼の中心地となる。『東都歳時記』によると、5月28日（現在の7月上旬）から花火とともに川開きとなり、8月28日までの間は両岸にある酒楼、茶店をはじめ見世物や夜店が出て、夜遅くまで繁盛した。両国橋の上は見物客で混雑し、川面を遊覧する船も「数万の灯を点じる」賑わいであった。両国橋の上流は玉屋、下流は鍵屋が受け持ち、それぞれ花火の技を競い合った。

146番

**歌川国貞（三代豊国）**  
**十二月之内 師走 餅つき**  
**1854年**

他の月と同じく一年の締めくくりとなる師走も、暦に従い様々な行事が決められていた。13日は煤払いで、身分に関わりなく一斉に大掃除が行われた。15日からは深川八幡宮境内の歳の市を最初に、日を改めてあちこちの神社で歳の市が催された。なかでも17-18日に開かれる浅草寺の市は最も規模が大きく、門松や注連縄をはじめ神棚や祭神の道具など、正月の調度が売られていた。26、27日は餅まきで、その時節はいたるところで朝から餅つきをする音が響いた。『東都遊覧年中行事』によると、賃銭を支払って餅屋につかせたものを賃餅、釜を持ち込んでついたものを引づり餅と呼んだ。後ろの女性たちは、餅を適当な大きさに分けて鏡餅を作っている。娘に抱かれた幼子が手にしているのは餅花と呼ばれるもので、小さく丸めた餅を木の枝にさして神棚に供えた。

143番

**歌川国貞（三代豊国）**  
**汐干景**  
**1820年代後半**

江戸の庶民にとって、汐干狩りは花見と並ぶ春の行楽であった。『東都歳時記』の記述に「汐干は三月より四月に至る、其内三月三日を節とす」とあるように、例年3月3日の大潮には早朝から船で沖に出かけ、正午頃に汐が引いて干潟が出てくるのを待ち、あらわれた砂地に降りて蛤や浅利、蜆などを拾った。大粒の蛤を籠一杯に拾い、二人がかりで運ぶ竿には干潟で捕った平目も吊下がっている。春の陽気のなかで汐干狩りに夢中になったためか、手ぬぐいを姉様被りにした中央の女性は上衣の片袖を脱いだ姿である。江戸では、芝浦・高輪・品川沖・佃沖・深川洲崎・中川沖が潮干狩りの名所として知られた。本図は品川沖であろうか、右手の遠景には汐干狩りの様子を眺める遊女たちの姿も描かれている。

141番

## 肉筆画

肉筆画（浮世絵版画の中でも描いたもの）は紙や絹に筆や絵の具を使って描かれた。ほとんどのこのジャンルの作品は浮世絵の下絵を描く絵師によって作成された。今日この用語は16世紀後半から17世紀初頭の筆で描かれた風俗画に広く使われる。また、19世紀後半から20世紀初頭の日本画家による近代の作品も示す。

歌川長政

大首絵

1818-30年

巻物に墨と絵の具

156番

磯野文斎

歯を磨く女

1830-44年

巻物に墨と絵の具

157番

歌川国宗

美艷仙女香の看板

1830 - 1844年

絹の巻物に墨と絵の具

154番

無款（伝葛飾北斎）

猿

1804-18年

絹の巻物に墨と絵の具

151番



谷文晁・小松原翠溪・喜多武清  
蝶・牡丹・猫図  
1830年代前期または中期  
絹の巻物に墨と絵の具

150番

幸野樸嶺  
見立女三宮  
1868-72年  
絹の巻物に墨と絵の具

153番

## 静観空間

初代歌川広重

東海道五拾三次 大尾 京師 三條大橋

1833 - 34年頃

京都にあるこの橋は東海道の最終地点。広重はこのシリーズで様々な版を作成し、なかには宿場の異なる要素を用いたが、常にこの橋を取り入れた。それぞれの版で江戸の日本橋から始まり、京都の三条大橋で終わるといった統一感を考えていたかもしれない。または、江戸っ子にとって馴染みのある京都のイメージをはっきりと伝えるために選んだ可能性もある。

13番